

教職大学院における中核科目の実際と課題

－「地域の教育課題解決演習」に関する質問紙調査の検討－

飛 岡 美 穂

Reality and Issues of the Core Subjects in Graduate School of Education

－ A Study of the Questionnaire Survey on “A Seminar to Solve the Educational Problems in the Area”－

Miho TOBIOKA

要 旨

本研究は、三重大学教職大学院 1 期生を対象とした質問紙調査をもとに、「地域の教育課題解決演習」に焦点をあて分析し、今後の中核科目の在り方について検討することを目的とした。調査内容は、「地域の教育課題解決演習 I」に関する質問及び「課題発見・解決実習（長期実習）」に関する質問であった。結果、「地域の教育課題」の共通理解、演習と学修テーマの関連等に関する課題が寄せられた。これらの課題及び「地域の教育課題解決演習」において学生が取り組みたいと考えている内容をふまえ、今後の改善が求められている。

キーワード：教職大学院、中核科目、学修テーマ、地域の教育課題、長期実習

1 はじめに

教職大学院は、教職に求められる高度な専門性を育成することを目的として、平成 20 年度にスタートした。そして、中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（2012）において、「学び続ける教員像」の確立の必要性が示され、教員を高度専門職業人として明確に位置付け、教職大学院制度の発展・拡充を求めている。

こうした中、三重大学は平成 29 年度に教職大学院を開学した。三重大学教職大学院では、「マネジメント能力」「課題発見・解決能力」「未来を拓く力」という 3 つの力を備えた高度専門職業人の育成をめざし、「地域の教育課題解決演習」と「課題発見・解決実習（長期実習）」を中核科目として位置づけている。「地域の教育課題解決演習」は、「(a) 理論と実践の融合、往還の具現化、(b) PBL チュートリアル教育の導入、(c) 研究者教員と実務家教員によるチーム指導」（「設置の趣旨等を記載した書類①」2015, 16 頁）を特色とし、試行錯誤を重ねながら前期の「地域の教育課題解決演習 I」を進めてきた。

「地域の教育課題解決演習 I」では、各学生の学修テーマ¹をもとに研究的な課題を明確にし、研究的なリソースやベンチマーキングを活用しながらデータの整理をしていくことを演習の課題とし、グループでの協同探究において結果を出すことを目的としている（「設置の趣旨等を記載した書類①」2015, 17 頁）。平成 29 年度は、「地域の教育課題解決演習 I」を 4 人の研究者教員が約 4 週間単位で順番にテーマを設定し実施した。各教員のテーマは「全国学力・学習状況調査結果（三重県）の分析と学校・授業改革」「三重県内にある地域素材から授業をつくる」「指導観、教育観について省察」「自明性を問い直す」で、各テーマにおける課題に異校種の現職教員学生と学部新卒学生とのグループや個人で取り組んだ。

開学 1 年目の「地域の教育課題解決演習 I」を終えた今、現時点での中核科目の課題を整理し、今後の改善の方向性を検討することが肝要である。

そこで、本研究では、教職大学院 1 期生を対象とした質問紙調査をもとに、中核科目の一つである「地域の教育課題解決演習」に焦点をあて分析し、今後の中核科目の在り方について検討することを目的とした。

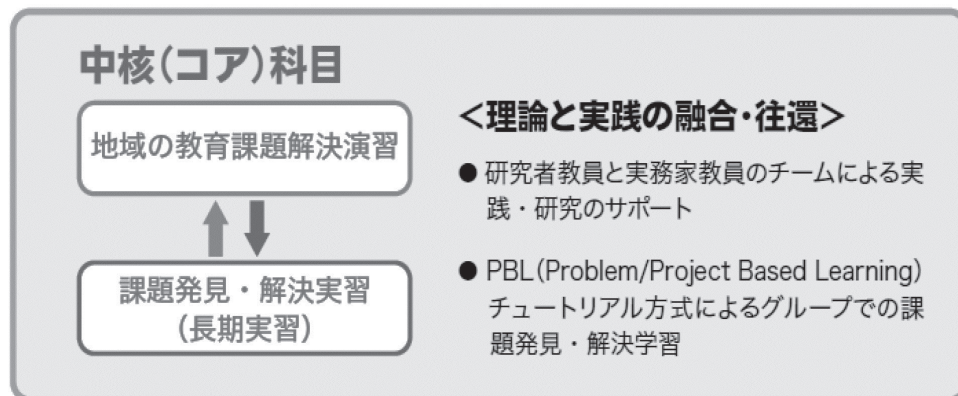


図 1 中核（コア）科目 （「2018 三重大学教職大学院パンフレット」2017 より）

2 方法

(1) 調査対象者

三重大学教職大学院の平成 29 年度入学生である 1 期生 15 名（現職教員 10 名、学部新卒者 5 名）を対象とした。

(2) 調査期間

前期授業が終了した平成 29 年 8 月 3 日から 8 月 17 日までで実施した。

(3) 調査方法

8 月 3 日に調査の依頼及び方法を口頭で行った後、メールで質問紙を送付した。なお、回答は記名式で依頼した。

(4) 調査内容

質問紙は、2 つの視点で構成した。

- 1 「地域の教育課題解決演習」に関する質問
- 2 「課題発見・解決実習（長期実習）」に関する質問

具体的な質問内容は下記のとおりである。

- 1 中核（コア）科目「地域の教育課題解決演習」について、ご意見をお書きください。
 - (1) 前期の「地域の教育課題解決演習Ⅰ」について、率直な感想をお書きください。
 - (2) 学校や地域の教育課題を反映した学修テーマを探究し、その成果を学校・地域の教育に還元していくために、前期の「地域の教育課題解決演習Ⅰ」をとおして、自身の学修テーマについてどのように深めることができましたか。
 - (3) 「地域の教育課題解決演習Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」で、どのようなことに取り組みたいですか。
- 2 中核（コア）科目「課題発見・解決実習（長期実習）」について、ご意見をお書きください。
 - (1) 事前打合せ等を経た現時点において、学修テーマに関わって長期実習で具体的に検討してみたいことや考えていきたいことはどんなことですか。

3 結果

(1) 質問紙の回収率

本調査での回収率は100%であった。

(2) 前期「地域の教育課題解決演習Ⅰ」について

学生が記述した内容は、大きく4つに分類できる(表中の①～④)。「地域の教育課題」の共通理解についてが12件と最も多く、演習形態についてが8件、大学教員の関わり方についてが2件、演習に対する評価についてが3件であった。

表1 前期「地域の教育課題解決演習Ⅰ」に関する自由記述

①「地域の教育課題」の共通理解 (12件)

- ・地域の教育課題解決とあるが、何をもって地域とするのかなどのコンセンサスに時間を割いてもよかつたのではないかと。
- ・教育課題という本授業のテーマとして深さがなかった。そもそも、「何をもって教育課題とするのか」「学校の教育課題と地域の教育課題の違い」「地域の範囲の定義」「立ち位置の明確化」の共通認識がされないまま行われた。
- ・教育課題とは何か、勤務校やその地域での教育課題とは何か、ということについての考察は必要だったと思う。
- ・入学前の大学院説明会で「地域の教育課題解決演習」について説明してもらったとおり、「各地域の課題を高等学校であれば各学校における地域課題、小学校、中学校であれば教育委員会と相談して設定した課題解決に取り組む」という受け取り方をしていた。実際受講してみて、随分説明会で聞いたイメージとかけ離れていた。「地域の課題」と言いながら、4サイクルのこの科目の展開の中で、三重県が抱える地域の課題を解決しようという演習が成されたかという疑問が残る。
- ・課題が地域の教育課題だったのかと疑問が残った。
- ・演習課題を出していただきグループで取り組んだが、自分たちで地域の教育課題そのものに気付いてないため、一つの課題としてこなした感がある。
- ・「地域の教育課題の解決演習」という講義名と内容のギャップは感じる。
- ・中核科目と銘打っている以上、この授業が教職大学院での大きな役割を担っていると思うが、中核となっているというよりは他の科目での学びの発表の場になっている。
- ・内容の斬新さと実現の可能性の間でかなり葛藤があった。実際に授業をつくるときに、学校としてどこまでできるのか、役に立つのか疑問がある。

②演習形態 (8件)

- ・PBLとのことだったが、tutorial的なものがなく、単にグループでワイワイ楽しくやるだけで、成果物も満足のいくものではなかった。
- ・課題に対する取り組み方がグループにゆだねられる部分がとても大きかった点が、自由であるというメリットもありながら、これで良いのかと思いながら進めるデメリットでもあったように感じた。
- ・演習の前半では、グループの課題と個人の課題が出されたが、結構難しい課題なだけにもっとじっくり時間をかけたかった部分があったが、他の講義の課題などもあり時間の都合上、やりきれなかったところもあった。グループ、個人、どちらかをじっくり取り組むスタイルの方が良い。
- ・様々な年齢・校種の方と一緒に課題に取り組むという経験はこれまでほとんどなかったので新鮮で

ある。

- ・グループ編成について、どのようなあり方がいいのか検討してほしい。もっとチームワークでやろうという空気作りに先生方にも協力いただきたい。

③大学教員の関わり方 (2件)

- ・探究過程で担当教官の指導等があった方が、完成度の高いプレゼンテーションができたと思う。

④演習に対する評価 (3件)

- ・発表して終わりのような感じがした。
- ・特にこれといって全体や個人に返ってくるものがなかったので、正直むなしさだけが残った。ある意味、我々が現場で子どもたちに課題を出す際、何もアクションがないとこういう気持ちになるということは学べた。

(3)「地域の教育課題解決演習Ⅰ」と学修テーマとの関わりについて

学生が記述した内容は、2つに分類できる(表中の①②)。学修テーマとの関連に課題があるが11件、一部関連したが4件であった。

表2 「地域の教育課題解決演習Ⅰ」とをとおした自身の学修テーマの深まりに関する自由記述

①学修テーマとの関連に課題 (11件)

- ・自身の学修テーマとの関連という視点はほとんどなかった。それぞれに校種も立場も違うメンバーでの探究だったので、その時々いただいたプロジェクトに対して役割を分担してこなしたという感が大きい。
- ・他の科目で学んだことを統合して発表する場だったように思っているの、この科目が直接、自身の学修テーマを深めることはなかった。
- ・直結はしなかった。そのように捉えて授業を受けていなかったのかもしれない。
- ・学修テーマと関連して考えることはできなかった。「地域の教育課題解決演習」において、前期の4つの課題を通して自身の学修テーマを深めることが教職大学院のねらいであったならば自分の認識不足が原因だとは思う。
- ・そもそも「学校や地域の教育課題を反映した学修テーマを設定する」ということが私のなかで理解できていなかったの、これは入試説明会でしっかりと受験者に理解してもらう必要がある。

②学修テーマと一部関連 (4件)

- ・やや関わる場所もあったように感じる。

(4) 今後の「地域の教育課題解決演習Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」で取り組みたい内容について

学生が記述した内容は、大きく6つに分類できる(表中の①～⑥)。「地域の教育課題」の明確化についてが3件、学修テーマに係る考察についてが7件、地域の具体的な課題に視点を置いた内容についてが4件、発達の連続性に視点を置いた内容についてが2件、授業力向上に係る内容についてが6件、事例等に基づく内容についてが3件であった。

表3 「地域の教育課題解決演習Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」で取り組みたい内容に関する自由記述

①「地域の教育課題」の明確化 (3件)

- ・「地域の教育課題の明確化」に取り組みたい。なぜそれが課題なのか、誰の課題なのか、その課題が解決することで得るものと失うものは何かなどについて、理解を深めていきたい。

- ・三重県の教育でどのようなことが課題になっているのか、その概観を知りたい。前期は、全体がわからないまま取り組んでいくことに対する不安があった。概観は教育ビジョンにも載っているが、それよりも少し踏み込んで学んでみたい。

②学修テーマに係る考察 (7件)

- ・それぞれの院生の学修テーマについて、その院生の困っていることや意見が必要ということについて、院生同士で意見を出し合いながら問題を解決していける時間があるといい。
- ・自分の実践をもとにした話し合いができ、さらにそこから課題や改善点などを見出せるような時間になれば理想である。
- ・中間発表会のようなことを月1回でもできないかと思う。他の人の学修内容を聞けるだけでもすごく学びになる。
- ・中間発表会で10分という短時間で、院生の学修内容を共有するのは難しい。定期的に進捗状況を報告したり、アドバイスをしあったりするタイミングがあればいいと思う。また、三重県の教育課題に照らして学修テーマを考察することができたら嬉しい。

③地域の具体的な課題に視点を置いた内容 (4件)

- ・三重県下各地域から院生が集まっているので、各地域の課題を自分たちで設定し、他班とともに解決していくという内容をやってみたい。(学習面・学校生活面等、ジャンルは幅広く設定してもいい)
- ・東紀州実習を意識して、地域における教育課題として、少子化を中心に考えたい。
- ・巡検(現地に赴き、三重県との比較を行う。またそこに住まう人間の営みや、地理・歴史などを学ぶ)をしたい。

④発達の連続性に視点を置いた内容 (2件)

- ・小中高の現職教員とストレートマスターが、それぞれの視点で多面的に思考できるのが、この演習の醍醐味であると感じる。それぞれの視点から、子どもにつけたい力を探り、そのために必要な取組や活動はどのようなものか発達段階において検討してみたい。

⑤授業力向上に係る内容 (6件)

- ・実際にアクティブ・ラーニング型の授業を体験する。さらに理解を深めるために、その理念、成果や課題、留意点を考える。
- ・教科教育専門の先生にアドバイスをいただきながら、教科の授業案を作って模擬授業をする。
- ・実践的な課題に取り組みたい。教科別などのグループ編成で授業実践を考える活動をしたい。
- ・新学習指導要領の「対話的」が、ひとクラス生徒2人や複式学級という現状でどのように行えばよいのかといった現状を見たうえでの課題解決演習を行いたい。

⑥事例等に基づく内容 (3件)

- ・校内研修会や公開研の後の事後研の在り方について、どのような時間にしていくのが理想的か考えたい。
- ・ケースメソッドのように、あるケースを与え、その解決策や改善提案を考えていくものが良い。ただ、チームベースとするのなら、それなりの仕掛けが必要である。

(5) 学修テーマと「課題発見・解決実習(長期実習)」との関わりについて

学生が記述した内容は、2つに分類できる(表中の①②)。「課題発見・解決実習(長期実習)」への課題についてが3件、「課題発見・解決実習(長期実習)」において学びたい内容が11件であった。

表4 学修テーマに関わって長期実習で具体的に検討してみたい内容に関する自由記述

①「課題発見・解決実習（長期実習）」への課題（3件）

- ・自身の学修テーマとは直接の関連はない。あえて言うならば、他校種を肌で感じること、そこから、自校へのヒントを得ること。現職教員が学校で10日間ほど、お客様の如くに実習をすることについて、大きな意義があるとは思っていない。
- ・東紀州実習においては学修テーマとどのように結びつけるか難しい。

②「学修テーマ」と関わり「課題発見・解決実習（長期実習）」において学びたい内容（11件）

- ・授業見学等がメインとなると思うが、子ども一人ひとりの観察から分析したり考察させていただいたりしたい。
- ・多くの課題を抱える学校、学級において教師が子どもたちとどのように関わり、そのなかで何が子どもたちの学びに影響を与えたかを実際観察したい。
- ・「深い学び」につながる教師の関わり方や、授業デザインについて考察していきたい。
- ・東紀州実習では、少人数学級での学び合いについて知りたい。
- ・地域のもつ特性や課題に対してどのようにかかわっていくか、授業外の部分でも多くの経験をした。
- ・地域の素材を生かした地域教材をつくりたい。
- ・複式学級の授業づくりについて検討がしてみたい。
- ・具体的な教科指導方法を考えていきたい。そのうえで、差し支えなければ附属学校実習でそれを試して改善し、来年の長期実習に備えたい。
- ・「わかる」授業のための工夫を知りたい。
- ・授業における学習指導要領とのギャップ、その理由を知りたい。
- ・学級経営で大切なことは何か考えたい。

4 考察

本研究では、教職大学院の中核科目、特に「地域の教育課題解決演習」における課題と改善の方向について探ることを目的とし、三重大学教職大学院生15名を対象に質問紙調査を実施した。以下、その分析とそれをふまえた今後の改善の方向について検討する。

(1)「地域の教育課題解決演習Ⅰ」における課題

一つ目は、「地域の教育課題の共通理解」である。表1①をみると12件と最も多くの意見が寄せられた。特に、現職教員学生の場合は、市町教育委員会、所属校と相談の上、学修テーマをもってきており、学修テーマは、地域、学校の地域的な課題という性格をもっている。そのような中、「そもそも何ををもって教育課題とするのか」「何ををもって地域とするのかなど」のコンセンサスに時間を割いてもよかったのではないかと意見があった。

これらのことから、入学当初に、それぞれの学修テーマをもとに学生同士で研究的な課題を明らかにしていく協議をもつなど、「地域の教育課題」とはそもそも何なのかを考える時間をとることも必要であると考えられる。

二つ目は、「演習形態」である。表1②をみると、演習でのグループ活動について「様々な年齢・校種の方と一緒に課題に取り組むという経験はこれまでほとんどなかったので新鮮である」という肯定的な意見もあった一方で、「PBLとのことだったが、tutorial的なものがなく、単にグループでワイワイ楽し

くやるだけで、成果物も満足いくものではなかった」との意見もあった。また、「グループ編成について、どのようなあり方がいいのか検討してほしい。もっとチームワークでやろうという空気作りに先生方にも協力いただきたい」「探究過程で担当教官の指導等があった方が、完成度の高いプレゼンテーションができた」と大学教員の関わり方への意見もあった。

「設置の趣旨等を記載した書類①」（2015）において「PBL チュートリアル教育の導入」「研究者教員と実務家教員によるチーム指導」と示していることから、PBL チュートリアル方式、協同探究の在り方について学生及び大学教員で議論し共通理解を図るとともに、多様な立場や校種の学生をどのようなグループ編成にするのか、大学教員がどのように関わっていくのか等の検討が必要であると考えられる。

（2）「地域の教育課題解決演習Ⅰ」と学修テーマとの関わりにおける課題

表 2①をみると「本演習と学修テーマとの関連に課題がある」という意見が 11 件寄せられた。その中には、「直結はしなかった。そのように捉えて授業を受けていなかったのかもしれない」と自分自身の意識を振り返る意見もあった。学修テーマにおける「地域の教育課題」を明確にし、本演習と学修テーマのつながりを自身で見いだしていく作業が必要であると考えられる。

また、「それぞれに校種も立場も違うメンバーでの探究だったので、その時々いただいたプロジェクトに対して役割を分担してこなしたという感が大きい」「内容の斬新さと実現の可能性の間でかなり葛藤があった。実際に授業をつくる時に、学校としてどこまでできるのか、役に立つのか疑問がある」という意見もあり、現職教員と学部新卒者という立場の違いや校種の違いのある学生を対象とした授業の内容や意図についての大学教員側の説明や配慮が十分ではなかったといった可能性も考えられる。

（3）「地域の教育課題解決演習Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」に期待する内容

表 3 の今後学生が取り組みたいと考えている内容は大きく二つに分類できる。

一つ目は、「学修テーマに係る地域の教育課題検討」である。

表 3②をみると「学修テーマに係る考察」に 7 件の意見が寄せられた。「それぞれの院生の学修テーマについて、その院生の困っていることや意見が必要ということについて、院生同士で意見を出し合いながら問題を解決していける時間があるといい」「自分の実践をもとにした話し合いができ、さらにそこから課題や改善点などを見出せるような時間になれば理想である」という意見から、異校種の学生とともに多角的、多面的に自身の学修テーマを検討したいと考えていることが推測される。

また、表 3 ③④の「三重県下各地域から院生が集まっているので、各地域の課題を自分たちで設定し、他班とともに解決していくという内容をやってみたい」「小中高の現職教員とストレートマスターが、それぞれの視点で多面的に思考できるのが、この演習の醍醐味であると感じる。それぞれの視点から、子どもにつけたい力を探り、そのために必要な取組や活動はどのようなものか発達段階において検討してみたい」という意見から、それぞれの学修テーマをもとに「地域の教育課題」を学生同士で明らかにしながら、様々なリソースやベンチマーキング等を活用し、地域や校種による特徴や共通点、課題の発見等を探る内容に期待していることが推測される。

二つ目は、「授業力、企画調整力、問題分析力、対応力、解決力」等の学校現場で必要となる能力の向上を企図する内容である。

学部新卒学生の「教科教育専門の先生にアドバイスをいただきながら、教科の授業案を作って模擬授業をする」「実践的な課題に取り組みたい。教科別などのグループ編成で授業実践を考える活動をしたい」という意見から、学部新卒学生は、学校で求められるより実践的な指導力、特に授業力の獲得につながる内容に期待していることが推測される。

また、現職教員学生の「校内研修会や公開研の後の事後研の在り方について、どのような時間にしていくのが理想的か考えたい」「あるケースを与え、その解決策や改善提案を考えていくものが良い」という意見から、現職教員学生は、多様化、複雑化している学校において中核的存在として力を発揮できる内容に期待していることが推測される。

(4)「課題発見・解決実習（長期実習）」における課題

表4①をみると、現職教員学生の長期実習に関して「現職教員が学校で10日間ほど、お客様の様実習をすることについて、大きな意義があるとは思っていない」との意見があり、実習期間、実習校の状況と学修テーマとの関連、学生の学校への入り方等の実習の在り方について検討が必要である。その際、例えば、連携協力校長期実習において、2週間は実習校で実習、次の1週間は実習校で提案できる企画を大学で計画、次の1週間は実習校で企画を実施など、学修テーマと実習校の状況に応じた柔軟な展開も考えられる。

その反面、学部新卒学生からは「具体的な教科指導方法を考えていきたい。そのうえで、差し支えなければ附属学校実習でそれを試して改善し、来年の長期実習に備えたい」「わかる授業のための工夫を知りたい」「学級経営で大切なことは何か考えたい」との意見が寄せられ、より実践的な指導力を身につけるために、学校現場で行う長期実習への期待が大きいことが推測される。

(5)「地域の教育課題解決演習」の改善の方向

①「地域の教育課題」の共通理解

学生から多くの意見が寄せられた内容であり、学生自身が「地域の教育課題」とは何なのかを理解するための協議等が必要であると考えられる。その際、現職教員と大学教員にとっては共通の認識や知識でも、学部新卒者にとっては初めて学ぶ内容もあるということも考慮し、現職教員と学部新卒者という立場や背景の違いをもつ学生がともに学ぶ価値を大切にしつつ、現職教員と学部新卒者それぞれのニーズに応える内容を考える必要があると考えられる。

②学修テーマをふまえた探究

「設置の趣旨等を記載した書類①」(2015, 23頁)には、教職大学院で学修テーマを探究することの意味について、「(a) 理論や歴史との関係で研修・研究テーマを見直す、(b) 全国的な動向の中に自らのテーマを位置づける、(c) 他者との対話的な関係の中で自らの探究を深めることにある」とある。学生が学修テーマを探究する意味を理解し、今一度、自身の学修テーマとの向き合い方を問い直す必要があると考えられる。

③「地域の教育課題解決演習」と「課題発見・解決実習（長期実習）」との往還

教職大学院での長期実習は、学修テーマによって実習校での学生の活動内容は変わってくる。学生は、学修テーマに応じた様々な取組の中で課題解決方法を探究し、その過程で理論と実践とを往還していくことになる。学生が、経験や勘に基づきがちであった実践を理論的に省察し、より多角的で広い視野から課題を捉え、解決の道を探究していくことができるよう、「地域の教育課題解決演習」と「課題発見・解決実習（長期実習）」との丁寧な往還が必要であると考えられる。特に、現職教員学生は、2年目の現任校実習において、自身の学修テーマを検証する。そのため、1年目の連携協力校長期実習・東紀州長期実習から現任校実習を見据え、PBLチュートリアル方式を活用しながら学生や大学教員とともに学修テーマを多角的、多面的に検討し、現任校に対する自身の見方を振り返りながら現任校実習での計画をたてていくことが必要であると考えられる。

④研究者教員と実務家教員のチームによる指導・支援の充実

平成 29 年度の「地域の教育課題解決演習Ⅰ」は、大学教員が設定した 4 つのテーマについてそれぞれ約 4 週間単位で順番に取り組んだ。各演習は、テーマをふまえて提示した課題から、学生が協同探究において真の問題の所在に気がつくことを意図した。そのような中、学生に実施した質問紙調査の結果から、特に「地域の教育課題の共通理解」「演習形態を含めた演習の在り方」「本演習と学修テーマとの関連」に課題があると捉えている学生が多いことが明らかになった。今後、「地域の教育課題解決演習Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の実施に向け、「地域の教育課題」「本演習と学修テーマとの関連」「本演習と「課題発見・解決実習（長期実習）」との関連」について、まずは大学教員間で協議し共通理解を図る必要があると考えられる。そして、演習内容、演習形態、大学教員の関わり方、学生への説明や配慮等について丁寧に検討し、共通の認識をもち演習に関わっていく必要がある。

「設置の趣旨等を記載した書類①」（2015, 16 頁）に、「地域の教育課題解決演習」は「大学教員全体の力で学生全体を指導・支援する科目」とあり、よりチームとしての指導・支援の充実が求められている。

注

- 1 現職教員学生は、個人的な研修テーマではなく、市町教育委員会に即した研修テーマの追究を大学院進学の動機とすることを前提とし、市町教育委員会と研修テーマを相談の上、派遣してもらう（「設置の趣旨等を記載した書類①」2015, 23 頁）。学部新卒学生の場合は、入学前の時点で研修テーマが明確に定まっていない場合も考えられるが、現職教員学生とともに学び合いをしていく中で、各自のテーマの意味や研究方法論が明確になってくると考えられる。この協同に参加する中で、また長期的・継続的な「課題発見・解決実習」をとおして、自らの研究課題を明らかにしていく（「設置の趣旨等を記載した書類①」2015, 24 頁）。

参考文献

- 中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」2012 年
三重大学「設置の趣旨等を記載した書類①」2015 年
三重大学教職大学院「2018 三重大学教職大学院パンフレット」2017 年